
テイルズオブジアビス～短編小説集ですの～

緋音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジアビス／短編小説集です／＼

【Zコード】

Z2915BA

【作者名】

緋音

【あらすじ】

此処には、テイルズオブジアビスの短編小説を置いて行きます。
時系列はバラバラになります。

また、各話によって設定が変わりますので、各話の前書き、あとがきを参考にしてください。

厳しめ要素あり（ルーク、イオン、ミュウはたいてい除外）

朱と赤茶の本音（前書き）

ルークとアニスによる同行者 + 灰巣しめです。

時期は外郭大地降格前後です。（多分）

この話のアニスはちゃんと仕事しています。（常識人）

また、この話のルークとアニス（イオンとミュウ）は真っ黒です。

朱と赤茶の本音

とある日の宿でのこと。

「なあ、アニス。誰もいないからひょっと話しあわせ」

朱は赤茶に話しかける。

同行者たちは買い物だのなんだの言つて出かけて行った。（イオン
モミニコウモ）

朱は赤茶を宿の部屋に案内する。

「いいですよ。で、何を話します？」

「あいつら、あの同行者と灰について」

「ああ、あいつらですね。王族を馬鹿にする、自分で自分の寿命を
縮めている馬鹿達ですね」

「ああ、そうだ！よく分かつてるなー」

「えへへ、アニス、ルーク様にあんな態度をとるあいつらが信じじら
れなくて」

2人は楽しそうに話しているが、その内容はどこか棘がある（あり
まぐる）

「まず、ティ、じゃなくて襲撃犯！」

「あいつですか。想像力のかけらもない、自分一人が正義、と思つてこる馬鹿ですよ」

「だよなあ。自分が戦えるから俺も戦え。どこの国の常識だよー?」

「子供も戦うつて、どんだけ非常時なんだよ!?」
と朱は続ける。

「ですよねえ。あいつの常識、微妙に世間の常識から外れてる感じ

「やっぱ、コリアシティで育てられたからか?」

「でしょ? あそこ、閉鎖的な街ですから」

「しかも王族にはタメ口。軍人には敬語。意味不明だ」

「2人は厳しく、だが的確に悪いところを挙げていく。(存在自体悪いのかもしれないが)

「じゃあ、次。俺の使用人で自称親友兼護衛剣士」

「・・・使用者と親友と護衛の意味を知らない馬鹿」

「お、簡潔にまとめたな」

「だつて、そうじゃないですか。あいつの中での親友って、夜中に武器もつてベットの横に立つ奴なんですよ」

「ああ、その通りだよ。しかも護衛しないし」

「ルーク様を前衛で戦わせる」とに異を唱えないなんて、護衛剣士失格ですよね」

実際に王族を前衛で戦わせてみる、即刻死刑だから。赤茶はそう続ける。

「使用者とか言いながら、窓から入つてくるんだぜ。あり得ないだろ」

「ホンツトその通りですよ。ルーク様、よくここまで生きていましたよねえ」

「あいつの中では俺よりも、襲撃犯の方が大事らしいしな」

彼にそのつもりはないのかもしねないが、朱が罵られているのに、襲撃犯を咎めようとしない、それどころか朱が謝らないといけない、などと言い出すのだ。

「じゃあ、次に死靈^{ネクロマンサー}使い。」

「和平をぶつ壊すために来た馬鹿」

「おいおい、あいつは天才と言われてるんだぜ」

「お言葉ですがルーク様、馬鹿と天才は紙一重つて言いますよお」

「あーなるほどー。ありがとうございます。アースのおかげで、俺また賢くなつた」

「いえ、お礼には及びませんよ。それよりも話の続きをしましょ
う」

「ああ、そうだな。あいつ、敬語なのにどこか俺を馬鹿にしてるよ
な」

「ホントは自分が馬鹿なのに、それに気が付かないおめでたい人
ですか？」

「ああ、俺の演技も見抜けないくせに。『コレだからお坊ちゃんは・
・・』ああ、これは同行者全員に言えることだけどな」

「戦場以外では役に立たない、そんな人ですか？」

「・・・あんなのが俺の生みの親なんて、最悪だ」

「ですよね。イオン様もおかわいそう」

「まあ、落ち込んでもしょうがないか。じゃ、次。偽姫

「どう考へてもおかしい事なのに、それに気づかないこれまたおめ
でたい人」

「紅髪と黒髪の間にどうやったら金髪が生まれんだよ」

「しかも『お父様なら許してくれます』ですよ。王命に背いて許
してもいいつもりなんですよ。信じられません」

「反逆者と、捕らえられてもおかしくないのに」

「アッシュが『俺が被験者だ!』といった瞬間、敵なのに仲良くし始めるし」

「何でおれよりも敵であるアッシュ、キムラス力を害したあいつを選ぶんだ!?」

「きっと、記憶の有無ですよ。悲しいですけど・・・」

「じゃあ、最後、聖なる焰の燃え渡」

「外見も中身の鶏頭の弱虫」

「だよなあ。短気で口調が悪くて、そんなので一国の王が務まるわけねえよな」

「自分が死ぬ預言が終わった瞬間『そいつは劣化品だ!』とか。ホント、逃げることしか能がない奴ですから」

「あー、俺って恵まれてねえよな。こんな奴らに囲まれて」

「でも、アースちゃんと、イオン様、あとミコウはルーク様の味方です!」

「ああ、ありがとう」

「はつあー、アースちゃん、もっと頑張ります!」

これが宿の一室で交わされた会話の一部始終だった。

朱と赤茶の本音（後書き）

実はこの話では、ルーク、アニス、イオン、ミュウは逆行してたりします。

ローレライを解放して、で、逆行。

みんな本編の3・4年前に逆行しました。

アニスは逆行後、前の自分の行動を起こさないように、努力しました。

で、この結果です。

悪夢から逃げる方法　死ネタ（前書き）

2話目が死ネタです（汗）。

時系列はED後。

ジェイドが無自覚のうちに病み、死にます。

流血表現がありますのでご注意を。

悪夢から逃げる方法　死ネタ

ルークは帰つてこなかつた。

帰つてきたのは被験者^{オリジナル}。

私は、こんな結果を望んでいたわけではない。

被験者^{オリジナル}が帰つて来てから、よく夢を見る。

その夢には2つの種類がある。

1つは、私が過去に殺した人たちが出てきて、私の存在を否定する夢。

もう1つは、仲間たちが出てきて、『何で大爆発^{ピックパン}を回避できなかつたんだ！？お前はフォミクリーの考案者だろ！？お前がもつと頑張れば、ルーク／俺は死なないで済んだかもしれないのに・・・』と、私を責めていく夢だ。

所詮夢だ。

なのに、これらの夢を見ると必ず怖くなる。

ざつすれば、こんな夢を見るのもなくなる？

今日は死神デイストの処刑日だ。

あの戦いで唯一六神将で残つた奴。

彼の処刑日。

処刑台にはデイスト、周りには民衆と、ピオニー、私がいる。

ネフリーは来ていない。

・・・処刑の時間になつた。

デイストは何故か微笑んでいた。

誰に向かつてでもなく、ただ微笑んでいた。

ピオニーは、デイストが死んでも表情を変えなかつた。

少し悲しそうにしていたが。

何故悲しいのか分からぬ。

ルークが帰つてこなかつたときだつて、悲しくなかつた。

少し残念に思つただけだ。

死んで何故悲しむ？

どうして？

・・・分からぬ。

それから私が見る夢の種類が増えた。

今度はディストに責められる夢だ。

『貴方が協力してくれたら、ネビリム先生も

ほぼ毎日、どれかの夢を見る。

寝れないことは無い。

けど、怖い。

寝れば誰かが私を責める。

誰かに相談もできない。

いつからか、私はリストカットを始めた。

死ぬためではない。

不安を消すために。

これをすると少しの間だけ不安がなくなる。

恐怖がなくなる。

私は第七音素が使えないため、左手首には幾多の切り傷が出来た。

でも、不安から、恐怖から逃げるためにはこれしかない。

今日も仕事を終え、家に帰ると服を着替える。

そして、机の引き出しから専用のナイフを取り出す。

それを右手に握りそと、手首をこする。

血が流れ出る。

ああ 今日にしし色た

しはぐく見たら白帯を巻く

二二二

たた 何たたし一もと這二

いともならこれで不安や恐怖が消えるのは

今日は消えない。

怖い、怖い！

怖い、怖い、怖い！

「ああああああああああ！」

助けて、誰か、助けて！！！

この不安から、恐怖から助けて！！！！

ハツ ハツ ハツ 私は 何を?

気付いた。自分でナイフを胸に突き刺そうとした。

・・・これを
棘したて 楽はなれますかね」

これを薦せは
きこと
不安も恐怖もなくなるはずだ

私は胸はナニへをそこと突き刺す

「・・・・あ」

肉を刺す感覚がよく伝わってきてくる。

一
・
・
・
力ハツ
一

せせり上かてあた血を吐出す。

「 う 」

私はその場に倒れる。

血がたくさん流れていく。

「・・・きれ、い、です、ね」

私は、目を閉じた。

きっと楽になると信じて。

「 なんだつて！？？」

宮殿にピオニーの叫び声が響いた。

「ジヨイドが、死んだ、だと？」

アスランが冷静に報告する。

「ええ、今日の朝、不審におもつた近所の住人が通報してきました。
家の中には大佐が・・・」

「・・・不審？」

「どうも昨日の夜、彼の叫び声が聞こえたらしいんです。まるで何かに怯えているような・・・彼は何に怯えてたんでしょう？」

「・・・夢、だろ？」

「夢、ですか？」

「俺には分かる。せつと、あいつは悪夢を見てたんだ。だから、逃げた……」

「……悪夢、ですか」

「へんつ、勝手に逃げやがつて、死にやがつて……！」

ピオニーは声を上げずに泣いた。

「……サフィールが、死んだ、あとで、お前、も、で死に、やがつて。俺は、お前等の、分ま、で生きていやる」

ピオニーは泣き、悔やみ、決心した。

たくさん生きてやる、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2915ba/>

テイルズオブジアビス～短編小説集ですの～

2012年1月10日19時55分発行